

St. Luke's International University Repository

働き方の多様性について考える

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-02-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松本, 佐知子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.34414/0002000410

【第29回聖路加看護学会学術大会：シンポジウム A】

働き方の多様性について考える

松本佐知子

近年、看護師としての知識と技術を生かして、多様な場で新たな役割を開発しながら活動する人々が増えている。

彼らはなぜそのようなキャリアを選んだのか、看護師であることが自身にとってどのような意味をもつのか、これらを明らかにすることが、本学術大会のテーマである「守る価値観と変える価値観」を洞察する一助になると考え、本シンポジウムを企画した。

最初の登壇者は、国際山岳看護師の中村富士美氏（市立青梅総合医療センター）で、登山者の安全を守るための健康管理に加えて、危機的状況にある行方不明遭難者の家族へのケアについて報告された。

次の登壇者で、起業家でもある大平智祉緒氏（株式会社 Rings Care）からは、エビデンスに基づく専門的・包括的な美整容ケアの創出と、サービスを通した利用者の QOL の向上についての報告があった。

最後の登壇者は、急性期ナースプラクティショナー（ACNP）の小平愛子ミッシェル氏（ジョンズ・ホプキンズ病院）で、アメリカの ICU でのチーム医療における ACNP の役割と強みについて、医師との類似点と相違点を具体的に示しながら、報告された。

各報告の後、新たな活動へのチャレンジの原動力や役割拡大に向けたプロセスについて、ディスカッションが行われた。

各シンポジストに共通しているのは「対象者を全人的にとらえる」「対象者のためになることはなにかを探究し続ける」「対象者に寄り添うようアプローチする」ことであった。これらは、看護の核となる価値観で、新たな役

割や活動を発展させるための原動力となっていた。彼らが新たな世界に踏み出すこと、自分の境界を広げていくことをいとわない姿勢でいるのは、自然な流れのように感じられた。

一方で、各シンポジストの活動には、他職種・他分野とオーバーラップする部分もある。たとえば、中村氏では山岳ガイドや山岳救助隊、大平氏では美容やレクリエーション分野、小平氏では医師や physician assistant などが該当するであろう。このため、活動を始めた当初には、様々な葛藤や困難があったと想像する。しかし、彼らは揺るぎない価値観に基づく、しなやかな強さとポジティブさを持ち合わせており、その姿勢が徐々に共感者を生み、活動を発展させていく好循環につながっていた。

看護は人の生活に深くかかわる仕事であり、人が生活する様々な場所や場面に、隙間を埋めつくすように入り込むことができる（勝原, 2007）。小平氏は伝統的な看護の場である医療機関で、中村氏と大平氏は既存の枠組みから飛び出した看護の場や場面で、人々の苦悩や喜びに深くかかわるべく看護のイノベーションを起こしている。彼らの活動報告は、今の自分の実践に課題を感じている、あるいは新たなチャレンジを考えている臨床家にとって、羽ばたいていくヒントになるにちがいない。

引用文献

勝原裕美子（2007）：看護師のキャリア論。ライフサポート社、神奈川。